

研究論文

青年期における恋愛と性行動に関する研究(1)¹

— デート状況と性行動の正当性認知との関係 —

牧 野 幸 志

A Study of the Heterosexual Romantic Relationships and Sexual Behaviors on a Date in Adolescence (1).

— The relationship between the dating activities and the cognition of justification toward sexual behaviors on a date. —

Koshi MAKINO

【要 約】本研究は、親しい関係にある男女が、どのようなデート状況において、どの程度の性行動を正当と考えるかを検討した。実験計画は、被験者の性別（男性、女性）×デートに誘う側（男性、女性からそれとなく、女性）×デート内容（映画、飲み会、相手のアパートへ、自分のアパートへ）の3要因被験者間計画であった。被験者は、大学生・短大生240名（男性120名、女性120名、平均年齢18.42歳）であった。従属変数は、性行動レベル別に、キス、ペッティング、性交の3測度であった。

3要因分散分析の結果、いずれの性行動測度においても、女性よりも男性のほうが、性行動を正当と認知していた。また、デート内容がより親密なものになるにつれて、性行動の正当性認知が高くなった。さらに、性行動レベルが進むにつれて、正当性の認知は低くなった。特にペッティングと性交については正当性認知が低かった。予想された被験者の性別とデートに誘う側の交互作用、3要因の交互作用は見いだされなかった。

キーワード：恋愛，性行動，正当性認知，デート，青年期。

¹ 本研究は、日本社会心理学会第48回大会で発表された。

1. 問 題

1.1. 恋愛研究と本研究の位置づけ

青年期における男女にとって、恋愛は非常に重要な人間関係である(松井, 1993)。恋愛に関する科学的研究は、ようやく進んできたところである(古畑, 1990)。恋愛研究は大きく4つに分類される(松井, 1990)。それらは、「恋愛に対する態度や認知」、「異性選択と社会的交換」、「恋愛感情と意識」、および「恋愛の進行と崩壊」である。本研究は、「恋愛の進行と崩壊」の分野の中で、恋愛の進展に伴う「性行動」に関するものである。恋愛関係にある男女はその関係が進展するにつれて、キス、ペッティング、性交などの性的関係を持つようになる。男女が付き合い始め、互いに親密度が増すと、性行動も自然な形で進んでいくように思われる。しかしながら、男女によって性行動に対する考え方が異なっていること、性暴力などの理由で望まない性行動が取られることが指摘されている(和田, 2000, 2007)。また、近年、性体験の低年齢化が進み、社会問題となっている(日本性教育協会, 2001)。本研究は、青年期の恋愛関係の進展の中での「性行動の認知」に注目する。男女関係において、性行動に対する男女の認知の違いは互いの恋愛感情、その後の恋愛関係に大きな影響を与えると考えられるため、非常に重要である。本研究では、親しい関係にある青年期の男女が、どのようなデート状況において、どの程度の性行動を正当と考えるかを検討する。

1.2. デートにおける性行動の正当性認知に関する性差

デートにおける性行動の正当性認知に対する男女のズレは、これまでデート・レイプの研究において検討されてきた(例えば, Muehlenhard & Cook, 1988; 大淵, 1991; 和田, 2000)。デート・レイプとは、「恋人関係のような親しい関係にあるカップルで、その片方によるもう片方への性暴力(言葉による暴力も含む)」を指す。Muehlenhard, Friedman, & Thomas(1985)は、デートの際の女性の行動を男性がどのように解釈するのかを明らかにしている。男性大学生のみを対象として、どちらがデートに誘うか(男性が誘う, 女性がほのめかし男性が誘う, 女性が誘う)、デート内容(宗教行事, 映画, 男性のアパート)により、「女性が望んでいなくても、男性が女性と性交することをどれくらい正当であると考えるか」を尋ねた。その結果、男性が女性を誘ったとき最も正当でないとされた。また、宗教行事に出かけるときには誰が誘ったのかにかかわらず正当でないとされた。一方、女性が男性を誘い、男性のアパートに行ったときが最も正当と認知された。

和田(2007)は、男性と女性の両方にデート・レイプの性交の正当性を尋ねることにより、男女の性行動の正当性認知のズレを明らかにしている。和田(2007)は、デートの誘い(男性が誘う, 女性が「とくにやることがないから」という理由で誘う, 女性が誘う)とデートの内容(映画, 飲み会, 男性のアパート)を操作した実験を行なった。その結果、性差がみられた。男性は誰がどのように誘おうとも、男性のアパートに女性がついてきたときが最も正当としている。他方、女性は、女性のほうから「暇だから」という理由をつけて誘い、男性のアパートに行ったときが最も正当としている。また、女性は映画や飲み会に行くときよりも、男性のアパートへ行った場合に性交がより正当であると考えていた。

これらの先行研究からわかるように、デート・レイプにおける性行動の正当性認知は、性差、デートの内容、誘う側の性別などのデート状況により、異なることが明らかとなっている。概して、男性のアパートに行った場合に性交を正当と認知しやすいことがわかる。

1.3. 先行研究の問題点と本研究の特色

恋愛における性行動と性行動の正当性認知に関する従来の研究(Muehlenhard *et al.*, 1985; 和田, 2007)には考慮されるべき問題がいくつかある。第1に、一般のデート場面における性行動の正当性認知を検討していないことである。Muehlenhard *et al.* (1985)や和田(2007)の研究は、性暴力(レイプ)に関する研究に端を発している。したがって、「女性が望んでいなくても」、あるいは「女性の意志に反して」性行動を行うというデート・レイプの状況を想定している。しかし、恋愛関係における性行動は、必ずしも「相手の意志に反するもの」ではないと考えられる。そこで、本研究では、デート・レイプの状況ではなく、一般的な男女のデートの状況での性行動の正当性認知を検討する。その際に、性行動レベルは、性交のみ(Muehlenhard *et al.*, 1985)ではなく、和田(2007)と同様にキス、ペッティング、性交の3段階を測定する。こうすることで、一般的なデートにおいて、どのようなデート状況(誘う側、内容)で、男女がどの性行動をどの程度正当であると認知するかが明らかとなる。

また、Muehlenhard *et al.* (1985)と和田(2007)では、デート内容として、①映画を見に行く、②飲みに行く、③男性のアパートに行くという3条件を設定している。この場合の「男性のアパートに行く」は、被験者が男性か女性かにより想像する状況が異なってくる。デート内容は、相手が「自分のアパートに来るのか」、自分が「相手のアパートに行くのか」により異なると予想され、その後の性行動の正当性認知にも影響を与えられられる。現実場面における相手への誘い方においても、「相手のアパートに行きたい」という場合と「自分のアパートに遊びに来ない？」という場合の2つが考えられる。したがって、本研究では、「アパートに行く」というデート内容を「相手のアパートに行く」と「自分のアパートに呼ぶ」に区別して性行動の正当性認知を検討する。相手の居住空間と自分の居住空間を区別することで、「男性のアパートに行く」場合に性交の正当性認知が高いという先行研究の結果をより詳細に分析することが可能となるであろう。

1.4. 本研究の目的

本研究の目的は、親しい関係にある男女が、どのようなデート状況において、どの程度の性行動を正当と考えるかを検討することである。特に、先行研究にみられたような性差について分析を行う。Muehlenhard *et al.* (1985)と和田(2007)のデート・レイプに関する研究結果、さらに、男性の方が女性よりも性に対して寛容であるという結果(和田, 2004)から以下の仮説を立てる。

仮説1：いずれの性行動レベルにおいても、女性よりも男性のほうが、性行動を正当と認知するであろう。

仮説2：デート内容がより親密なものになるにつれて（映画、飲み会よりも、アパートへの誘い）、性行動の正当性認知が高まるであろう。また、性行動レベルが進むにつれて、正当性認知は低くなるであろう。

仮説3：男性被験者は女性が自分のアパートに来たとき、女性被験者は女性が「暇だから」という理由で自分または相手のアパートに行ったとき、最も性交を正当と認知するであろう。

2. 方 法

2.1. 実験計画と実験手続き

実験計画は、2（被験者の性別：男性、女性）×3（デートに誘う側：男性、女性からそれとなく、女性）×4（デート内容：映画、飲み会、相手のアパートへ、自分のアパートへ）の3要因計画であり、すべて被験者間要因であった（24条件）。被験者は、大阪府内の大学生・短大生240名であった（男性120名、女性120名、平均年齢18.42歳）。各条件10名ずつ無作為に条件に割り当てられた。実験は「大学生の生活に関する調査」として真の目的を隠して、集団で調査票への無記名式の回答により行なわれた。実験に要した時間は約20分であった。

2.2. 独立変数の操作

実験は場面想定法を用いた。独立変数の操作は、すべての調査票の中で説明文の提示により行なった。また、実験条件の割り当ては調査票をランダムに配布することで行なった。

デート状況 まず、太郎と花子の関係を説明した。「太郎と花子は、同じ大学の学生でお互いによく話す友人関係にあります。これまで二人きりで遊びに行ったことはありません。」その後、デートの状況の説明を文章で示した。デートの誘い方は和田(2007)の実験と同様であった。誘う側の設定は、次の3条件であった。①太郎が花子を誘う（男性がデートに誘う）、②「とくにやることがないから」という理由をつけて花子が太郎を誘う（女性がそれとなくデートに誘う）、③花子が太郎を誘う（女性がデートに誘う）。デートの内容は、和田(2007)を参考に新たに1条件加えて、次の4つを設定した。①映画を見に行く、②飲みに行く、③相手のアパート（一人暮らし）に遊びに行く、④自分のアパート（一人暮らし）に遊びに来ない（か）と誘う。例えば、男性が女性を映画に誘う実験条件においては、「ある日の講義後、太郎は花子をデートに誘いました。『今週の土曜日、映画を見に行かない？』 花子は、OKしました。」という説明文を提示した。12種類（誘う側×デート内容）の調査票をランダムに被験者の男女に配布することにより独立変数を操作した。

2.3. 従属変数の測定

デート状況の説明文を読んだ後に、次の質問を行なった。「デートの結果、土曜日の夜、太郎君と花子さんが以下のような関係をもつことはどの程度正当だ（正しい）と思いますか？」測定する性行動の正当性認知は、性行動のレベルに合わせて、キス、ペッティング、性交の3測度とした。それぞれ、「太郎君と花子さんが〇〇（性行動）をすることは…」について、「全く正当

ではない」(1点)から「非常に正当である」(7点)の7段階で評定を求めた(得点が高いほど正当であると認知)。

3. 結 果

3.1. キスの正当性認知

各デート状況において、太郎と花子がキスをするに対する正当性の認知について3要因の分散分析を行なった(Table 1)。その結果、性別の主効果が有意であった($F(1, 216)=7.83$, $p<.01$)。どちらが誘うか、デート内容にかかわらず、男性($M=4.36$)は女性($M=3.81$)よりもキスすることの正当性を認めていた。また、デート内容の主効果が有意であった($F(3, 216)=2.85$, $p<.05$)。多重比較の結果、相手を自分のアパートに誘った場合($M=4.48$)は、映画に誘った場合($M=3.72$)に比べて、キスすることの正当性を高く認めていた。

Table 1 デート状況とキスの正当性認知

被験者の性別 デート内容 / 誘う側	男性			女性		
	男性	女(暇)	女性	男性	女(暇)	女性
映画	4.00	3.50	4.60	3.10	3.20	3.90
	(1.49)	(2.01)	(2.01)	(1.60)	(1.62)	(1.73)
飲み会	5.00	4.00	4.00	4.00	3.00	3.60
	(1.63)	(0.94)	(1.25)	(1.16)	(1.49)	(1.65)
相手宅へ行く	4.00	4.80	4.20	4.50	3.90	3.80
	(1.56)	(2.35)	(0.79)	(1.84)	(1.29)	(1.03)
自分宅へ誘う	4.80	4.60	4.80	4.00	4.50	4.20
	(1.62)	(1.51)	(0.79)	(1.89)	(1.18)	(0.79)

注) $N=240$, 数値は平均値, 得点範囲1~7点, ()内は標準偏差

3.2. ペットティングの正当性認知

各デート状況において、太郎と花子がペットティングをすることに対する正当性の認知について3要因の分散分析を行なった(Table 2)。その結果、性別の主効果が有意であった($F(1, 216) = 6.72, p < .01$)。どちらが誘うか、デート内容にかかわらず、男性($M = 3.69$)は女性($M = 3.15$)よりもペットティングすることの正当性を認めていた。ただし、7段階の3点台の得点なので正当でないという認知である。また、デート内容の主効果に有意傾向がみられた($F(3, 216) = 2.51, p < .10$)。多重比較の結果、相手のアパートに遊びに行った場合($M = 3.67$)と相手を自分のアパートに誘った場合($M = 3.67$)は、映画に誘った場合($M = 2.97$)に比べて、ペットティングすることの正当性を高く認める傾向がみられた。

Table 2 デート状況とペットティングの正当性認知

被験者の性別 デート内容 / 誘う側	男性			女性		
	男性	女(暇)	女性	男性	女(暇)	女性
映画	3.10	2.30	4.00	2.70	3.00	2.70
	(1.10)	(1.64)	(1.76)	(1.77)	(1.89)	(1.83)
飲み会	3.80	3.30	3.60	3.70	3.00	2.90
	(1.93)	(1.42)	(1.08)	(1.25)	(1.70)	(1.45)
相手宅へ行く	3.50	4.40	4.00	4.00	3.00	3.10
	(1.65)	(2.46)	(0.82)	(2.06)	(1.56)	(1.37)
自分宅へ誘う	4.10	3.80	4.40	2.80	3.50	3.40
	(1.60)	(1.48)	(0.97)	(1.93)	(1.72)	(1.43)

注) $N = 240$, 数値は平均値, 得点範囲1~7点, ()内は標準偏差

3.3. 性交の正当性認知

各デート状況において、太郎と花子が性交することに対する正当性の認知について3要因の分散分析を行なった(Table 3)。その結果、性別の主効果が有意であった($F(1, 216)=9.93$, $p<.01$)。どちらが誘うか、デート内容にかかわらず、男性($M=3.35$)は女性($M=2.68$)よりも性交することの正当性を認めていた。ただし、7段階の3点台前半の得点なので正当とは考えていない。また、デート内容の主効果が有意であった($F(3, 216)=3.69$, $p<.05$)。多重比較の結果、相手のアパートに遊びに行った場合($M=3.28$)と相手を自分のアパートに誘った場合($M=3.25$)は、映画に誘った場合($M=2.42$)に比べて、性交することの正当性を高く認めていた。ただし、7段階の3点台前半の得点なので正当とは考えているわけではない。

Table 3 デート状況と性交の正当性認知

被験者の性別 デート内容 / 誘う側	男性			女性		
	男性	女(暇)	女性	男性	女(暇)	女性
映画	2.80	2.20	3.30	2.10	2.10	2.00
	(1.14)	(1.62)	(1.83)	(1.73)	(1.20)	(1.33)
飲み会	3.50	3.00	3.80	3.20	2.30	2.90
	(2.22)	(1.49)	(1.23)	(1.32)	(1.49)	(1.52)
相手宅へ行く	2.80	4.10	3.40	3.70	2.60	3.10
	(2.10)	(2.64)	(1.51)	(2.00)	(1.51)	(1.20)
自分宅へ誘う	3.80	3.30	4.20	2.30	3.30	2.60
	(1.75)	(1.57)	(1.14)	(1.70)	(1.83)	(1.27)

注) $N=240$ 、数値は平均値、得点範囲1～7点、()内は標準偏差

4. 考 察

本研究の目的は、親しい友人関係にある男性と女性が、どのようなデート状況において、どの程度の性行動を正当と考えるかを検討することであった。被験者の性別、デートに誘う側、デート内容の3つの観点から、性行動の正当性認知を検討した。

4.1. デート状況と性行動の正当性認知との関係

本研究では、デート状況を誘う側とデート内容の2要因で操作し、キス、ペッティング、性交の性行動レベルでその正当性認知に差がみられるか検討した。まず、キスの正当性認知については、被験者の性別による差が明らかにみられた。男女のどちらが誘うか、デートの内容にかかわらず、男性被験者は女性被験者よりもキスすることの正当性を高く認めていた。また、デート内容による差がみられた。映画に誘った場合よりも相手を自分のアパートに誘った場合にキスすることの正当性を高く認めていた。この結果は、映画や飲み会よりも(男性の)アパー

トに行った場合に正当性が高いという和田(2007)とほぼ同様の結果であった。デート内容がより親密なものになるにつれて、キスをすることの正当性を高く認めることがわかる。特に、アパートなどの居住空間に行くあるいは誘った場合に、キスの正当性の認知が高くなると考えられる。その正当性認知の評定値は、男性被験者では4点台半ばであり(7段階評定)、現代の男子大学生が初めてのデートにおいてキスを行うことの正当性を比較的高く認知していることがわかる。

次に、ペッティングの正当性認知についても、キスの正当性認知の結果と同様に被験者の性差がみられた。男女のどちらが誘うか、デートの内容にかかわらず、男性被験者は女性被験者よりもペッティングすることの正当性を高く認めていた。ただし、7段階の3点台の得点なのであまり正当でないという認知であった。また、デート内容による差がみられた。映画に誘った場合よりも、相手のアパートに遊びに行った場合と相手を自分のアパートに誘った場合に、ペッティングすることの正当性を高く認めていた。この結果も和田(2007)とほぼ同様の結果であった。デート内容がアパートなどの居住空間に行くあるいは誘ったなどより親密なものであるとき、ペッティングの正当性の認知が高くなると考えられる。

さらに、性交の正当性認知についても、被験者の性別による差がみられた。男女のどちらが誘うか、デートの内容にかかわらず、男性被験者は女性被験者よりも性交することの正当性を高く認めていた。ただし、7段階の3点台の得点なのであまり正当でないという認知であった。また、デート内容による差がみられた。映画に誘った場合よりも、相手のアパートに遊びに行った場合と相手を自分のアパートに誘った場合に、性交することの正当性を高く認めていた。この結果も和田(2007)とほぼ同様の結果であった。ただし、和田(2007)では、男性が誘うよりも女性が理由をつけずに誘うほうが性交の正当性が高かった。デート内容が親密なものであるとき、特にアパートなどの居住空間に行くあるいは誘った場合に、男女ともに性交の正当性認知が高くなると考えられる。ただし、相手のアパートに行った場合、自分のアパートに誘った場合でも、正当性の認知は、7段階の3点台前半の得点なので正当とは考えているわけではない。

分析の結果、いずれの性行動レベルにおいても、どちらが誘うか、デート内容にかかわらず、女性よりも男性のほうが性行動を正当と考えていることがわかった。したがって、仮説1は支持された。これは、性に対する寛容さの性差によるものであると考えられる。女性よりも男性のほうが、性に対して寛容な考えを持ち、道具性が高い、逆に女性のほうが性に対して保守的であり、性に対する責任性が高い(NHK放送文化研究所, 2000, 2004; 和田, 2004)。このことから、男性のほうが女性よりもデート状況における性行動を正当と考えるのであろう。次に、いずれの性行動においても、デート内容がより親密なものになると正当性認知が高くなった。映画などのデートよりも相手のアパートに行く、あるいは自分のアパートに誘うというデートの場合に、性行動の正当性を高く認知していた。また、キス、ペッティング、性交と性行動レベルが進むにつれて、正当性認知は低くなっていた。したがって、仮説2は支持された。映画や飲み会に行くというデートよりも、「アパートに行く、アパートに誘う」という個人的空間へ侵入許可という行為が性行動への期待や正当性を高めるのであろう。しかし、本研究で想定した

男女は「同じ大学の学生でお互いによく話す友人関係で、これまで二人きりで遊びに行ったことはない」という関係であった。したがって、性行動、特にペッティング、性交に関しての正当性認知が低かった。このことは、一般的に、初回のデートでペッティング、性交を正当とは認知していないことを示している。

本研究では、被験者の性別とデート内容の交互作用、被験者の性別、誘う側、デート内容の交互作用はみられなかった。したがって、仮説3は支持されなかった。どちらがデートに誘うかは、性行動の正当性認知には全く影響を与えていなかった。この結果は、Muehlenhard *et al.* (1985)と和田(2007)と異なる結果であった。おそらく、これはデート・レイプの研究では、「女性が望んでいなくても」という質問をするため「どちらが誘ったか」が問題になるものと推測されるが、今後、再検討する必要があるだろう。本研究では、一般的なデート場面においては、男性のほうが女性よりも性行動を正当と認知しており(期待しており)、デートの内容が相手のアパートに遊びに行くなどのより親密な状況のとき、性行動を正当と認知することが明らかとなった。

4.2. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点と今後の課題について述べる。第1に、本研究では性行動の正当性認知を説明する要因を検討していない。なぜ、男女で性行動の正当性認知が異なったのかを詳しく分析するために、デート時点における互いの恋愛感情、デートに誘われたときの特異性(不思議に思ったか?など)、あるいは「伝統的性役割」(和田, 2006)や「性に対する態度」(和田, 2004)などの要因を測定する必要があっただろう。第2に、各条件内の被験者数の不足である。本研究では、すべて被験者間計画で実験を行い、24条件に被験者をランダムに配置した。1条件の被験者数は10名であり、結果を一般化するには多少問題があると思われる。

最後に、今後の課題をあげておく。二者間の親密度をより詳細に設定して検討する必要がある。本研究では、「同じ大学の友人」という関係で「これまで二人きりで遊びに行ったことはない」という条件設定であった。和田(2007)では「同じ講義を受けている知人」という設定であった。つきあい始めたばかりの恋人、つきあってしばらく経過した恋人というより親しい関係では、性行動の正当性認知はどのように異なるかなど詳細に調べていく必要があるだろう。

引用文献

- 古畑和孝 (1990). “愛”の特集号の編集にあたって—愛の心理学への序説— 心理学評論, **33**, 257-272.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井 豊 (1993). 恋ごろの科学 サイエンス社
- Muehlenhard, C. L. & Cook, S. W. (1988). Men's self reports of unwanted sexual activity, *Journal of Sex Research*, **24**, 58-72.
- Muehlenhard, C. L., Friedman, D. E., & Thomas, C. M. (1985). Is date rape justifiable? : The effects of dating activity, who initiated, who paid, and men's attitudes toward women, *Psychology of Women Quarterly*, **9**, 297-310.
- NHK放送文化研究所(編) (2000). 現代日本人の意識構造 第5版 日本放送出版教会
- NHK放送文化研究所(編) (2004). 現代日本人の意識構造 第6版 日本放送出版教会
- 日本性教育協会(編) (2001). 「若者の性」白書—第5回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- 大淵憲一 (1991). 暴力的ポルノグラフィ—女性に対する暴力, レイプ傾向, レイプ神話, 及び性的反応との関係— 社会心理学研究, **6**, 119-129.
- 和田 実 (2000). 望まない性行動—性および心理的要因からの検討— 思春期学, **18**, 361-371.
- 和田 実 (2004). 大学生の性に対する態度, 性行動と恋愛について 東京学芸大学紀要第1部門(教育科学), **45**, 155-165.
- 和田 実 (2006). 男性役割葛藤, 男性役割規範意識と性および心理変数との関連 名城大学人間学部人間学研究, **4**, 53-76.
- 和田 実 (2007). デート中の性行動の期待と正当性についての男女の認知差—デートの誘いとデート内容が及ぼす影響— 思春期学, **25**, 139-148.